

富士山頂で多彩な研究

4年目の夏スタート

NPO法人「富士山測候所を活用する会」(理事長・畠山史郎東京農工大学教授)の夏季観測・研究が12日、スタートします。無人化された気象庁の旧富士山測候所(現・富士山特別地域気象観測所)を借り受けて行うもので、今年で4年目。大気化学、放射線科学、高所医学など多彩なテーマで21グループ、のべ約450人が参加します。

大気化学分野は、アジアからの越境大気汚染の観測、二酸化炭素濃度の通年測定など8件。高所医学分野は、中高年登山者の山頂滞在時の負担度、山頂での低酸素症への対策など5件が計画されています。このほか、深さ10メートルの観測孔を掘って永久凍土の地温変化を直接調べる研究や、宇宙線の観測なども行います。

また、太陽光パネルを設置するなど、自然エネルギーとバッテリーを組み合わせた省エネ観測所をめざします。

昨年までの研究で、平地では健常の20代と60代の男性が、山頂で睡眠時無呼吸になった例が報告されています。調査した井出里香さん(東京都立大塚病院医長)は「山頂では、呼吸中枢による指令が、うまくいかない。血中の酸素が少なくなるため、心肺への負担が大きくなり、持病のある人の突然死の原因になるかもしれない。こうした実態は、これまで分かっていたいなかった。安全登山への対応が必要だ」と話しています。

◆ ◆

同会は8月22日までの土日に9回、小学生以上(保護者同伴)を対象に「富士山学校科学講座・測候所見学会」を実施します。高所医学や越境大気汚染などの研究内容を解説します。現地集合・現地解散で参加は無料。日程や申し込み方法は、同会ホームページで。